

引喩と暗喩 (二)

——源氏物語における白氏文集、「上陽白髮人」など

一 上陽白髮人——帚木

「上陽白髮人」(一本に「上陽人」)は白氏文集卷三(諷諭三)にのせる一詩だが、この一節は『千載佳句』にも『倭漢朗詠集』にも採られ、また水野氏(二〇〇ページ—二〇三ページ)によると源氏物語以下蕪村の句に到るまで数多く引用されており、日本人にこよなく愛好された詩である。

源氏物語自身においても、この引用は五か所に及ぶが、その第一は「帚木」に見える。例の雨夜の品定めと俗称される件りの中でも有名なのは左馬頭の体験談、とくに指食い女の話であろうか。これは男が嫉妬深い女とつき合った話で、嫉妬によって男の浮気心も多少薄らぐ一方邪険に扱って嫉妬を直させようとする、また女は醜女ながら夫に尽すのだがついに姿を隠してしまふ、そして別れてし

まうというのでもないが男の気持が変らない以上積極的に愛し合おうとはせず、そのまま死んでしまった、という話である。

いかにも源氏らしい、しかも光源氏少年期の話題にふさわしい情話で、白氏の「上陽白髮人」とは大層趣を異にしよう。こちらは一人の美女が若くして玄宗に召されたにもかかわらず楊貴妃のために嫉妬されて上陽宮にとじこめられ、そのまま六十歳の齢を迎えたというものである。一見の共通は感じられないであろう。

しかし源氏の次の一節、

醜き容貌をも、この人に見や疎まれんと、わりなく思ひつくろひ、疎き人に見えは面伏せにや思はんと、憚り恥ぢて、みさをもてつけて、見馴るるままに、心もけしうはあらずはべりしかど……

に對して『一葉抄』は、

中 西 進

他人にあしく見えハ男のおもてふせならんと云心也

という指摘をする。源氏では醜女である女が、みずからの容貌によつて疎んじられはしないかと氣をつかい、疎遠な他人に見られたら夫の面目にもかかわるだろうと他人をはばかり、固く態度を守つて振る舞つたというのであり、一方白詩にあつては、長年上陽宮にいるものだから服装も流行おくれで、世間の人が見ることはないにしても、もし見たらきつと笑うだろうという件である。引用は古沢氏（六ページ）によつても承認された。このあたりの白詩を掲げてみよう。

小頭鞋履窄衣裳 青黛点眉眉细长

外人不見見必笑 天宝末年時世粧

先のとがった靴をはき、青色の黛で眉を細長く引く。これは天宝末年に流行した化粧だから、上陽宮の外の人が見たら、笑うにちがいない、というのである。

どうであろう。この両者をくらべてみて、似ていると思う人は、いないのではないか。私もそう思う。もし両者を結びつけるなら、他人が見て笑うことに共通性があるにすぎず、そんな事柄は数限りなく登場するにちがいない。

しかし、事を表現に限らず、より広く構想上のこととして見ると、「上陽白髮人」は諷諭詩であり、白氏みずからが記すように、「慙怨

曠也」というものであった。ちなみに注を転記すると、

天宝五載已後楊貴妃專寵後宮人無復進幸矣六宮有美色者輒置別所上陽是其一也貞元中尚存焉

というごとく、ここにとりあげられた美女は楊貴妃によつて排斥された後宮の女の姿であり、その薄幸を悲しむ形で楊貴妃の專寵を諷諭した詩がこれであつた。美女を白氏は、

上陽人苦最多 少苦老亦苦

少苦老苦詞如何

という。少苦とは天子に召されて親族との別離を悲しみ、宮中に入つたとて寵せられることなく過ぎたことであり、老苦とはそのまま上陽宮に老を迎えて寂寥に苦しむことである。

そして、こうした運命を女に強いたものは、他ならない楊貴妃の嫉妬だという。

未容君王得見面 已被楊妃遥側目

妬令潛配上陽宮 一生遂向空房宿

嫉妬も、そもそも後宮に美女が多数集められたからだといつてしまえばそれまでだが、それを前提として考えれば、この女をあやつたものが、別の女が「側目」め妬んだ情念にあつたことを、この詩は訴える。その結果女は「怨曠」の中にすごさなければならなくなつた。

ところで指食い女は「もの怨じ」をする女であつた。嫉妬という、

男女間の古くて新しい問題は、古く『魏志倭人伝』に倭の女が嫉妬しないと記述されたことから始まり、記紀の磐姫像を造り上げて以後、恋愛文学のもっとも大きな話題の一つであった。源氏も、その流れに棹さすもので、光源氏の性教育にとって、至極当然な話題だったといえる。指食い女の段は、そんな情念のしがらみが男女関係をどうあやつってゆくかを、問題としたものだった。女は、

もの怨じをいたくしはべりしかば、心づきなく、
思われる女で、醜女なりに夫に心をつくしながら、

ただこの憎き方ひとつなん心をさめずはべりし。

「憎き方」とはいうまでもなく嫉妬である。そこで少しこらしめたら直るだろうか、

いかで、懲るばかりのわざして、おどして、この方もすこしよろしくもなり、さがなさもやめむ、

と思う。「この方」とは嫉妬する面のことである。

しかし、やはり、

例、腹立ち怨ずるに、

と態度は変らない。結局のところ別れ話になって、男は、

手を折りてあひみしことを数ふればこれひとつやは君がうきふし

と歌を贈る。「これひとつ」とは嫉妬する欠点のことである。

こう見てくると、指食い女の物語の主題が嫉妬という「もの怨

じ」であることは明らかであろう。上陽人をあやつったものと、これはひとしい。嫉妬は女の美醜を問わず、普通の主題だといったかったのか。いや、楊貴妃とて嫉妬において心の醜女であったというべきだろうか。また、白詩は嫉妬される側をとり上げ、源氏はする側をとり上げた。その相違も大きいが、両者を相対化してみると、楊妃の心の内側は指食い女とひとしいことになる。白詩の覗かなかったものを、源氏は覗こうとしたか。

もう一つ、対比的に考えるとおもしろいことがある。白詩でいう「怨曠」とは寵せられることもなく一人で上陽宮にいる身をいつたものである。そもそも「怨」とは配偶者をえないか、あっても夫と長く離別している女のことをいい、「怨女」「怨婦」といったことがある。反対が「曠」で、これは「曠夫」というように妻のない男のことをいう。だから白詩がとり上げる「怨」は正当な婚姻関係を欠く怨みだが、一方源氏の「もの怨じ」は白詩の「妬」に当る怨恨である。夫が他の女のものとあつて情況的に「怨」であることは一致しているが、より情念を重んじるのが源氏であろう。同じく「怨ず」と字音語としてこの文字を使いながら、恋愛物語への変容がある。そして、それなりに情念的な嫉妬が強調されることもあった。しかし、源氏は、こうした白詩との相対化による自作の有効性を、右の一節によってのみ企てようとしたのではない。

女につれなくしながら、ある夜左馬頭が女の許にいつてみると、

灯ほのかに壁に背け、なえたる衣どもの厚肥えたる、大いなる籠にうちかけて、引きあぐべきものの帷子などうちあげて、今宵ばかりやと待ちけるさまなり。さればよと心おごりするに、正身はなし。

という。

この「灯ほのかに壁に背け」について、古来「上陽白髮人」の引用が指摘されてきた。たとえば『源氏物語聞書』では、

耿々残燈の心あり

といい、『河海抄』も同趣である。近代でも水野・丸山・古沢諸氏いづれも引用を認める。

「耿々残燈」というのは、

秋夜長 夜長無寐天不明

耿々残燈背壁影 蕭々闇雨打牕声

のことで、この二十四句は『倭漢朗詠集』にもとられたほか、当詩引用の諸書の中でも、もっとも多くとられた個所である。

とくに『太平記』（巻一、立后事付三位殿御局事）には、

皎々タル残燈ノ壁ニ背ケル影、薰籠ニ香消テ、蕭々タル暗雨ノ

窓ヲ打声

とあり、この第二句は白詩にないもので、あるいは源氏の「大いなる籠にうちかけて」などが入りこんだものか。この籠と薰籠とは全く同じものではないが、もし連想作用があるとすれば、『太平記』

の語り手の中には、源氏における白詩の引用が承知されていたことになる。

そもそも「壁ニ背ケル影」など、そう一般的に登場するはずのものではない。源氏の「灯ほのかに壁に背け」は「灯をうすぐらくして壁の方へ向け」たろうことをすぐ想像させるが、白詩の「皎々タル残燈ノ壁ニ背ケル影」は、なかなか理解しがたい。そのために古来の注解は区々である。

これについては傳良平氏に詳論があり、これを借りてあげると、燃え残りの灯火が壁のかげにはの暗い光りをなげかけ（内田泉之助『白氏文集』中国古典新書十）

ちらちらするあけがたの灯も壁の向こうにやって（田中克己『白楽天』漢詩大系十二）

壁によって立つ小暗い燈の下に（佐久節『白楽天全詩集』続国訳漢文大成）

壁のかげにたてました燃え残りの灯の光りがギラギラと明るく（高木正一『白居易』中国詩人選集四）

の如くである。いづれも「背壁」の訳を避けているように見受けられ、また文章としてもまともなものがない。中では田中・高木両氏が「背壁」を配慮しているが、これはいま定説化しようとしている村上哲見氏の説にもとづくものである。

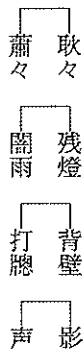
この村上説は「背燈」と同一と見るもので、「背燈」を就寝時に

帷の陰においた燈のこととする。

しかし「残燈」の「背壁影」と「背燈」とを同じとすることはできない。傳氏は「背」に「背面着或靠着」の意味がある（『辭海』）ところから「ほのぐらい灯が壁によりかかつて、微弱な灯影が壁に形成された」と解するが、「靠」にしても背面を「靠着」していることが条件だから、やはり燈は背面を壁に向けている必要がある、燈の正面はこちらに向いているのであろう。

ところが微弱な光のためにこちらへの輝きより、むしろ背面の壁を照らし、壁があるゆえに動きが知られる燈影のちらつきが作者の目を捉えているのであろう。「壁に背を向けた燈のほのぐらい明り」と解したい。

燈という輝きを捉えながら、むしろ明より暗の光を発見した詩人の感覚は非凡である。そしてそれが次句と一對をなし、



と見事な形式美を作っていることも、いうまでもない。

さて、そのように非凡で稀少な表現が「背壁」の燈だとすると、源氏の「灯ほのかに壁に背け」も、源泉がここにあるとせねばなるまい。

のみならず、源氏は左馬頭が女の家を訪れたこの日を、先立って、臨時の祭の調楽に夜更けて、いみじう霰降る夜、

だと述べる。すると灯がほのかに壁に向かって背けられた部屋の外には蕭々と部を打つ闇雨があったことになる。白詩は「秋夜」で、こちらは陰曆十一月の下旬だからすでに冬の夜だが、雨蕭々たる夜であることにおいて、変りはない。

また、こうして白詩がこの部分に重なってくるとなると、急に次の「なえたる衣どもの厚肥えたる」が目立つ。これは夫に尽くす女の情を示すものだろうが、それなりに醜女の深情けが重く感じられて、スマートではない。いかにも生活的だが洒落れてはいない。

これは上陽人が「小頭鞋履窄衣裳」という流行遅れの服装を大事にしていたことを、連想させずにはおかぬ。いかにも融通のきかない、大そうな服装は、同じような野暮さを示してくれる。

こうした中に、先の「外人不見見応笑」という伏線が、これまたひそかに受けとめられているのであろう。

そしてさらに、男は「さればよと心おごりするに、正身はなし」という。今度は女がおらず、男は一人にされたのである。これを文字でいえば「曠」なる男になった、ということになる。女が「怨」なることを恨み、別れ話を男がもち出した後で、それでいながら訪れると準備万端をととのえて「曠夫」にされたという笑い話である。白詩の「慇懃曠」をそう文字どおり受けとるのは間違いだとしても、期せずして「怨・曠」を描いてみせるのが源氏物語であった。

そこで、こうした源氏を読む読者にとって「上陽白髮人」は何も

働きかけなかったとは考えがたい。右のような関係を源氏が白詩にもっていたとしても、読者は「上陽白髮人」の連想から自由でありえただろうか。

私は自由ではありえないのが当時の読者だったと思う。たしかに後宮の美女と指を食う女とは違いすぎる。女尚書となり深宮に月を眺める身を指食い女に重ねることはできない。

しかしこの小話を光源氏という皇子として生まれた貴公子の一代記の、その青春の日の挿話として読むと、事はおのずから趣をかえてくる。とくに、一種の性教育のような若衆宿めいた一隅での、さみだれの夜に光源氏に向かって語られた話であることを考えると、上陽人の境遇は、それに近いものを光源氏は身辺にまといつかせることとなる。大きく展開してゆく、数々の恋愛物語の発端に語られた小話であることは、意義が大きいであろう。

先立っても、母更衣は、楊妃さながらの「側目、妬」の中に落命したといつてよい。上陽人の境遇は他人事ではなかったし、これからも引きうけるべき葛藤であった。

源氏の作者は、自らが展開しようとしている男女の絵模様の中に、抜きさしならないしがらみと悲運とがひそんでいることを、冷やかに見通していたであろう。

二 上陽白髮人―賢木

「上陽白髮人」の中には、この美女が宮中に召される件りがある。

玄宗末年初選入 入時十六今六十

同時采沢百余人 零落年深残此身

玄宗皇帝の末年に十六歳をもって宮女に選ばれた百人あまりの中の一人だったが、今は六十歳の老残の身となった、というのである。この十六歳と六十歳という数は六と十とをさかさにしただけの戯れではないだろう。それなりの意味をもっていると思うが、さりとてこれが一般的にきまっていた数だったわけでもあるまい。白詩でいえば、

宜当備嬪御 胡為守幽独 無媒不得選 年忽過三六

(卷二、統古詩十首)

妾住洛橋北 君住洛橋南 十五即相識 今年二十三

(卷十二、長相思)

自言本是京城女 家在蝦蟇陵下住 十三学得琵琶成

(卷十二、琵琶行)

のように年齢を具体的にあげ、まるでモデルがいるごとくだが、やはりこれは創作に属するものであろう。

するといまの十六歳の選入、現在の六十歳も、白氏によって作られた年齢と思われ、これを「上陽白髮人」固有のものと考えること

ができるだろう。

ところで源氏には「賢木」に六条御息所が娘の伊勢下向にとまって参内する記事があり、そこにすぎこしが回想される。

御息所、御輿に乗りたまへるにつけても、父大臣の限りなき筋に思し心ざして、いつきたてまつりたまひしありさま変りて、

末の世に内裏を見たまふにも、もののみ尽きせずあはれに思さる。十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞ、今日また九重を見たまひける。

これによると御息所は十六歳で春宮に召されたことになり、後の皇后を夢みたのがこの齡だったが、二十歳で春宮と死別、いま三十歳に到って神域に入ろうとしているという。

三十歳というのは女房なら御達ともいわれるようになる齡であり、さだすぎるこの年に源氏との恋を見切り、都を去ることとするのは、作者にとって必然性がある。その必然性は、先の上陽人が六十歳を迎えて、

今日宮中年最老 大家通賜尚書号と述べられるのと、ひとしいであろう。

もう一つ、源氏に二十歳という区切りがあるが、これは概数としていま問題にしないこととすると、十六歳というはんな数がさらに一つある。これはいかなる意味をもつか。

実はこれについてはすでに論があり、丸山キヨ子氏は御息所の運

命を上陽人と重ねて、より印象づけようとしたものだといっているのである。

そう考えざるをえない大きな根拠は、次の点にある。結論的にいえば、右の年齢が源氏全体の年齢と合わず、故意に「十六」をとったと考えられる点である。

つまり、右で御息所二十歳の折とされる春宮死去は光源氏が四歳の時として「桐壺」に見える。「明くる年の春、坊定まりたまふ」とは光源氏三歳の折の記述で、坊として後の朱雀院が定まったことは、御息所の夫、前春宮の死去によるであろう。

だから御息所の参入はさらに四年前、光源氏の出生前年となる。ところがこれから計算すると、いま「賢木」の参内では御息所が三十九歳となってしまう。三十歳だと書かれていたものである。

一方、現在三十歳とし、十六歳の春宮参入を認めると、これは源氏九歳の折となり、「桐壺」の記事と矛盾をきたす。反対に死去を源氏四歳の時のこととすると、御息所の参入は七歳、春宮死去の折は御息所十一歳となる。しからば今、御息所は三十歳である。

結局七歳の参入を認めるか、朱雀院立坊を九年遅らせるかによって整合性がでてくるのだが、この場合、前者をとらざるをえないだろう。あるいは二十歳の死を疑うこともできるが、それにしても参入は最高十一歳である。

これらによって十六歳が故意に用いられ、その理由に「上陽白髪

人」があるとする事は、認めてよいであろう。

ただ、もう一つ、藤壺中宮の入内も十六歳に想定されている。もし御息所参入について「上陽白髮人」をいうのであれば、中宮についても何がしかを配慮すべきであろう。もとより、中宮の年立に作意がないことも重大な関心事である。

さて、それでは十六歳を「上陽白髮人」に基づくものとすれば、これは単なる年合わせにすぎないのだろうか。源氏の作者の意図とかわりなく、十六歳から「上陽白髮人」を連想する読者は、どのようなイメージを持たざるをえないのだろうか。上掲の丸山氏の論文（一九ページ）は、「この不幸な女性を上陽人の運命になぞらへて印象づけた」というが、さらに考えてみよう。

まず右にも掲げた御息所の描写によると、参入時の親族の「限りなき筋に思し心ざして、いつきたてまつりたまひしありさま」が報告されるが、これを「上陽白髮人」でいえば、

憶昔吞悲別親族 扶入車中不教哭

皆云入内便承恩 臉似芙蓉胸似玉

ということになる。しかしこれも昔のこととして、期待は空しかったのだが、そのことも源氏では、

そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちにものぞかなしきと述懐される。

この回想の中では四年間しか春宮との生活がない。二十歳以後の

十年間は、まさに上述の「怨」の女であった。これもやがての国母として十分な美女とうまれたからで、やはり「呂向美人賦」をもつて傷まれるべき女性だった。そのゆえに、

上陽人苦最多 少苦老亦苦

少苦老苦兩如何

という歳月が回想されていたのである。

両苦をたたえた上陽宮は、

一生遂向空房宿

といわれる「空房」であった。空房での数十年がどうであったか、書き抜いてみよう。

秋夜長 夜長無寐天不明

耿耿殘燈背壁影 蕭々閣雨打牕聲

春日遲 日遲独坐天難暮

宮怨白蟬愁厭聞 梁燕雙栖老休妬

顰婦燕去長悄然 春往秋來不記年

唯向深宮望明月 東西四百廻円

「怨」の女の空房はかくの如くで、たとえ「休妬」とはいついていても、やはり「妬」の主題が空房にまで影を引いていることが知られるだろう。

それでは一方、同じく十六歳で妃となり、四年後から十年「怨」の中にいる女はどうか。「夕顔」の巻といえば御息所は夫との死別

後四年をへた頃だが、その邸は、

御心ざしの所には、木立前栽など、なべての所に似ず、いとのかくに心にくく住みなしたまへり。

(夕顔)

という。けつして侘しさをいうのでもなく、むしろ優雅なたたずまいは、この末亡人をしばしば形容することばと似通ってはいるが、しかしそれは上陽宮とて同じで、風景としては罵さえずり燕飛び、いともどこかである。

だが、これを心理の上に移してみると長秋・永日の苦しみとなり、怨曠の女には鳥どもも懶く目に映る。

この心理を形象化したのが、伊勢下向を決意した後の、野宮の描写であらうか。

はるけき野辺を分け入りたまふよりいともあはれなり。秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれる虫の音に、松風すごく吹きあはせて、そのこととも聞きわかれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり。

(賢木)

野宮であることは十分斟酌されねばならないが、この寂寥にみちた建物は、御息所を包む情況としてきわめて心理的に象徴的に見え、この心理性において上陽宮に通うところがある。

御息所には秋好中宮もいるし、もろもろの条件において上陽人と異なるしろ、上陽人十六歳の入内を知っている者にとっては、その「怨」なる周辺の寂寥がすぐに思い出されたであらう。

そして、同じ十六歳でも藤壺中宮と違う点は、いうまでもなく六条御息所における嫉妬の執念にある。御息所は宮廷女性群をめぐる恋愛物語にあって、もっとも基本的な嫉妬を分担する役目をもって登場せしめられた。あの優雅の装いは、そんな割りの合わない役廻りの代償だったかもしれないが、とくに物の怪という本質的なあり方において嫉妬を語るという構想上、彼女はもっとも重要な登場人物の一人であった。

この役割りは死後の回想にまで引きつがれ、源氏の述懐をもって終焉を見る(鈴虫)。この愛の執念にみちた半生を簡単にいったのが、当の「賢木」の十六歳参入云々の記事であった。

上陽人として楊妃への反感、嫉妬はより強くあったろう。「上陽白髮人」は被害者の側だけを述べるが、このしがらみは相互にひとしはずである。

そんな葛藤を忘れたたい作者の筆が、年立を枉げたのではないか。

三 上陽白髮人一幻

「幻」の巻は、紫の上死去の後、ひたすら悲しみにくれる源氏を叙した一巻である。出家の念も深まる。

だから一人家居がちにすごす。わずかに女房どもが相手に、既往ばかりが思いかえされる状態であった。そんな中で源氏は、

疎き人にはさらに見えたまはず。上達部なども睦ましき、また

御はらからの宮たちなど常に参りたまへれど、対面したまふこととをさをさなし。

というふうであつた。

そこで、この「疎き人にはさらに見えたまはず」に対して、『岷江入楚』『花鳥余情』は「上陽白髮人」の、

外人不見見応笑

を典故としてあげる。すでに「帯木」の「疎き人に見えば面伏せにや思はむ」についてあげた個所である。

この引用について、丸山キヨ子氏（二二〇ページ）は原詩と物語との意味が違っているから「転用といへるかどうか、それ程大げさな事柄ではないまでも、一脈の関連はみとめられるであらう」とし、「一寸しやれたいひまはしとして、閉ぢこもつた源氏君の説明に幽閉の佳人を歌つた詩の言葉を使つてみたと思へられないであらうか」という。

たしかに、意味は別である。上陽人は流行おくれの服装をいうものだし、源氏は悲しみの深さに他処の人には会わないというものである。

ただ、すでに「帯木」で事情を知っている読者は「疎き人に見えず」ということばが、他人の失笑をかうものだという了解をもつていたはずだし、今の「幻」においても、単に悲しみにくくて会いたくない、というばかりではないことも、察知したであらう。内々の

女房たちには心のたけを語っているのだから。ただ「疎き人」は「外人」だけの問題としてるのである。

そのとおりに、右につづく源氏の述懐を少し読んでみると、

月ごろにはけいたらむ身のありさまかたくなしきひが事まじりて、末の世の人にもてなやまれむ後の名さへうたてあるべし。思ひ、はれてなん人も見えざむなると言はれんも同じことなれど、なほ音に聞きて思ひやることのかたはなるよりも、見苦しきこと、の目に見るは、こよなく際まさりてをこなり。（園点中西）

源氏が外人に会わない理由は身の「ほけ」にあつた。呆けて、うつけた状態となつた身が他人に知られ、後々の評判となることを心配しているのである。また、外人がいち早く「はけたらむ身」を知つてしまい、そのために会わないのだということがあつても、やはり、実際に会つて「ほけ」ぶりの見苦しきを見られてしまうのは、もっと愚かなことだと考えたのだった。

これはまさに「面伏せ」となることを苦慮しているのであつて、「帯木」と気持はひとしい。何よりも「見応笑」という予測をもつて外人に会いたくないと考えたのだった。

上陽人は服装において「ほけ」ているだろう。それは美女の誉高く人内した女性にとって「面伏せ」のことであつた。同じく高貴の誉高い光源氏にとって、「ほけ」はわれとわが身に許すまじき「面伏せ」であつた。

今や光源氏には老残の思がある。紫の上に死なれば、まさに残燈の身を生きたがらえているだけで、もはや死しか待ちうけていない。

事実、この「幻」の年をもって光源氏の生涯は記述を失う。次に「雲隠」をおくにしても、光源氏は事実上死んだといつてよいだろう。その証拠に、若い匂宮が紫の上を母と呼んで登場している。すでに生命は次代へと形をかえつつあるのである。いまの光源氏の苦しみは「老苦」といってよいだろう。

そしてまた、この「上陽白髮人」の語句が今や「曠」夫となった光源氏に用いられていることは、重大ではないか。実は後々にも引かれる「上陽白髮人」を含めて、引用は情況を白詩とひとしくする。「外人不見見応笑」や「殘燈背壁影」を引いた「帚木」も嫉妬を主題とする話で、詩が楊妃の嫉妬による女を主人公としたのとひとしかったし、情況的には男が訪れても女がいまいという「曠」の件りだった。また「入時十六」という「賢木」も御息所という妬女の、しばしば怨女となった果ての引用だった。その点は、実は以下の上陽氏においても変らない。

当面の引用もその内の一つとして理解されるべきであろう。今や紫の上に死なれた源氏は男性ながら、孤闇の曠に堪えざるをえない。女三の宮や明石の君がこれを代替しえないことは、つづいて両者をたずねつつ心慰まない記述をもって、雄弁に語られているであろう。

どうやらこれは、ちょっと洒落れた表現にはとどまらないらしい。「幻」がもう一か所「上陽白髮人」を引用するのも、同じ手法の中にある。紫の上を失った秋から年が改まり、その年も進んでいま光源氏は五月雨のころを迎えている。

五月雨はいとどながめ暮らしたまふより外の事なくさうざうしきに、十余日の月はなやかにさし出でたる雲間のめづらしきにと、時を五月雨のころと設定したのも、そもそも「さみだれ」が、「さ乱れ」であって、古来心を乱すものとして歌われてきたからであらう。

そして月明の中の橘の花をいい、そこから追風にのってくる香りを述べては「千代をならせる声」とだけいつて暗示させるのはほととぎすである。

色かへぬ花橘にほととぎす千代を馴らせる声聞こゆなり

読人しらず(後撰集一八六)

このほととぎすが死者の霊であることは、いうまでもないだろう。ところが月明の花にもかかわらず、おどろおどろしく雨が降ってくる。

にはかに立ち出づるむら雲のけしきいとあやにくにて、おどろおどろしう降り来る雨に添ひて、

とは、まるで死靈蘇生の舞台設定のごとくではないか。心を乱す五月雨、月、故人をしのばせるような花の香と並べ、そしてほととぎ

すを待つといった上で天候のおどろおどろしさを告げるのである。

いかにも空漠たる、恋人を欠いた空房の寂寥は極まったというべきだが、「上陽白髮人」はこの中に姿を見せる。

さと吹く風に燈籠も吹きまどはして、空暗き心地するに、「窓うつ声」など、めづらしからぬ古言を、うち誦じたまへるも、をりからにや、妹が垣根におとなはせまほしき御声なり。

この「窓を打つ声」が、すでに「帚木」でもふれた、

歌々残燈背壁影 蕭々闇雨打牕声

の一節であることは、いうまでもないだろう。「古言」を誦じたというのだから、これは一般的なことばを口にしたのではない。ここで「めづらしからぬ」というのは、誰にでも共感できる有名な古言という意味であらう。

おもしろいことに、この場面にはすでにあげた『後撰集』のみならず、引用が集中している。右の「妹が垣根に」などと、「妹」という大層古風なことばが登場するのも古歌の引用にちがひなく、『河海抄』が、

独りして聞くは悲しきほととぎす妹が垣根におとなはせばやなる古歌をひくのは、正しいであらう（ただし、出典不明）。この歌も紫の上を連想した引用である。

白詩は、これらと並んで引用された「古言」といってよいだろう。だから当然紫の上思慕、過去の生前への追想の一翼を担うものでな

ければならぬ。

たしかに、紫の上を欠いた源氏の宿は、上陽人の空房に通い合うものがある。上掲の後につづく部分を再掲すると、

春日遲 日遲独坐天難暮

宮闈百轉愁厭聞 梁燕雙栖老休妬

盟婦燕去長悄然 春往秋來不記年

という。まだ一年になっていないから部分的には異なるが、悄然たる日々であることはひとしいだろう。「唯向深宮望明月」はつい今しがたのことであった。

こんな情景の中で光源氏は紫の上をしのぶのだが、さてその中心は上述のとおり「曠」にある。「上陽白髮人」が今引かれ、「妹が垣根」の古歌と軌を一にする点は、孤閨、一人であることの寂しさであった。

そこで、これほどに上陽人が紫の上思慕と重なっているとすると、当然上陽人が紫の上その人とも重ねられてくるだろう。

光源氏が今、上陽人を透かして思い出しているのは紫の上の肉体だろうか。いや紫の上の現し身を通して上陽人が着想されたのだから。上陽人は、

臉似芙蓉胸似玉

という。これはまことに抽象的でものたりないが、紫の上はもとより美貌の持ち主で、そのさまはいろいろと記述される。中でも有名

なのは、夕霧のかいま見における描写で、

気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、

おもしろき樺桜の咲き乱れたる心地す。

(野分)

という。その「愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき」様子であった。時に二十八歳。

また須磨から帰京した源氏に姿を見せた紫の上も美しかった。

いとうつくしげにねびととのほりて、御もの思ひのほどに、ところせかりし御髪のスこしへがれたるしもいみじうめでたきを、

(明石)

これは二十歳の紫の上である。

このほか紫の上は「らうらうじ」「匂ひやか」「愛敬づく」などと

形容され、死に顔、(四十三歳)は、

飽かずうつくしげにめでとうきよらに見ゆる御顔 (御法)

と語られる。

いま源氏は、この死に顔を九か月前のものとして追憶していることになる。芙蓉のような顔、玉のような胸とは、けっして無縁のものではあるまい。

いや、こう追憶してみると、上陽人との関係においてもとも思ふに当るものがある。

すなわち嫉妬である。

女三の宮の降嫁にともなう紫の上の苦悩は、もはや云々するまで

もない、源氏の大きな主題の一つである(若菜上、以下)。それは、

たとえば秋山虔氏によって「薄雲」の紫の上を「いわば嫉妬物語の主人公としての紫上像はここで完了したのである」と語られるほど

「嫉妬物語」を源氏は内蔵し、その中で紫の上を成熟させている。

いかに嫉妬するか――、この物言いはいささか奇詭にひびくであろうが、事実そうした表現によって源氏物語における人物操作を見ようとする意見がある。それが源氏の一つの主題であり、その伏線として、例の指食いの女の話を考えるのである。

すべて、よろづのこと、なだらかに、怨すべきことをば、見知

れるさまにほめかし、恨むべからむふしをも、憎からずかす

めなさは、それにつけて、あはれもまさりぬべし。(帚木)

左馬頭の指食いの女の話に入る前の「理想的な」嫉妬である。

もし、こうした物語の冒頭をうけての、実践者としての造型が紫の上に付加されているのだとしたら、いや、そう見るのが通例なのだが、いま光源氏が紫の上を回想する折に嫉妬を主題とする「上陽白髪人」を思い出さない方が妙であろう。

「上陽白髪人」を紫の上の死後に倍音として響かせることは、十分理由ある事柄だった。いや、嫌でも「上陽白髪人」を読者が思い出すはずだと作者に計算できれば、それに乗じて芙蓉や玉の如き肉体を紫の上に付与することが可能だったし、一方それが肉体を失った「怨曠」の中にあってみれば、その効果は大きかったと思える。

そもそも物語に玉の如き胸を述べることはない。そのリアリティを漢籍から与えようとしたとすれば、この引喻の意味は大きい。おそらく、同じ「幻」の「外人不見」は、この収束に向かつての第一石だったと思われる。

四 上陽白髮人―竹河

「竹河」の巻にいたって源氏物語は大きく趣を改める。先立つ「幻」における光源氏の死への親しみ、次の「雲隠」の空白。そして「竹河」の前に「匂宮」「紅梅」の二巻をおいたとしても、年立からいえば「匂宮」「竹河」から、源氏第二世の物語が始まる。薫十四歳、これが新しい物語の主人公である。

したがって、まるで演奏会の始まる前のチューニングのように鬚黒家という舞台の上で、人々の出入りがにぎやかである。とりしきるのは未亡人の玉鬘。男子三人女子二人という子だくさんの家庭から、一人一人の運命が語り出され、それぞれの筋をつむいでゆく。中でも問題なのは二人の姫君である。そこへ、冷泉院、帝そして藏人少将の求婚があり、玉鬘は女一人であれこれと思い、きめかねて悩む。

内裏にも、必ず宮仕の本意深きよしを大臣の奏しおきたまひければ、大人びたまひぬらむ年月を推しはからせたまひて仰せ言絶えずあれど、中宮のいよいよ並びなくのみなりまさりたまふ

御けはひにおされて、皆人無徳にものしたまふめる末に参りて、遙かに目をそばめられたてまつらむもわづらはしく、また人に劣り数ならぬさまにて見む、はた、心づくしなるべきを思ほしたゆたふ。

そこで右の「遙かに目をそばめられ」が「上陽白髮人」の、

已被楊妃遙側目 妬令潜配上陽宮

を引くことは、一見明瞭であろう。丸山（二〇五ページ）・古沢（五ページ）両氏また古典全集本の頭注にも、そのよしが見える。「遙かに」といい、「側目」を「目をそばむ」に当てたと考えるのは、妥当であろう。

何しろここは入内をめぐる話であり、「明石の中宮の、いっそう並ぶ者としてなくなっていく威勢に圧倒されて、他の女御、更衣たちがみな無用になっておられるらしい、そのさらに末席に加わった上で」、遙かに目をたてられるのも厄介だというのだから、状況は上陽人が楊貴妃に始まれるのと、全くひとしい。これは以上のもののように、異なったケースの中で暗喻しようとしたのとは別で、明らかに引用し、その故事とひき合わせようとしたものである。

結局のところ大君は冷泉院の宮に入り、中君は帝の許に入内するから、特に、

明石の中宮 楊貴妃

中の君 上陽白髮人

ということになるが、しかしここではもう少し広げて、冷泉院へ入内した大君もともに、後宮集団における女性群のあり方として参加していると考えるべきだろう。

何しろ母玉璽もかつて入内をめぐって話題のあった人物で、だのに鬚黒に嫁するというタイプを与えられた女性だった。それを母として、次代のステレオタイプが娘たちに与えられようとしているのである。上述のように、新しい物語の冒頭として、いかにもふさわしいであろう。

先代の冒頭も、同じ楊貴妃の「長恨歌」で作者は語り始めた。いま次代の冒頭は同じ内容を「上陽白髮人」で語り始めたのである。

そこで興味深く思われることは、源氏作者の用意のほどであろう。ここで入内が話題だから、とかく思いつきがちな女集団の嫉妬を、ちょっと上陽人を借りていつてみただけなのか。それとも深く物語全体に浸透した関心だったのか。

「竹河」の記述によれば明石の中宮は楊貴妃の役割を与えられているのだが、中宮はいうまでもなく明石入道の孫、明石の君と源氏との子であり、けっして貴紳の出ではない。その出自は大尼君から昔語りとして中宮にもたらされ、中宮の心中で反芻される。

わが身は、げにうけばりていみじかるべき際にはあらざりけるを、対の上の御もてなしに磨かれて、人の思へるさまなどともかたほにはあらぬなりけり。

(若菜上)

と。そしてこの楊妃はつつしみ深く、

身をばまたなきものに思ひてこそ、宮仕のほどにも、かたへの人々をば思ひ消^めち、こよなき心おごりをばしつれ。世人は、下に言ひ出づるやうにもありつらむかし。

(同)

としみじみと思うという。

こうした受領階級に出自をもつ女も、たとえば常陸宮ゆかりの末摘花とか、筑紫に流浪した玉璽とかともども、源氏が巧みに登場させた一グループの女だが、さて一方の楊貴妃も、出自は王室になり。

楊妃の父は楊元琰、彼は閩郷の人とされ、平棘の令であった。のち軍功によって弘農郡公となったが、一介の地方出身者にすぎなかった。

この出自はともどもに似通っている。とくに中宮がわが血統を深く承知したとする筋立は作者の意識を示そう。その中では「竹河」で楊妃に中宮を擬してもよいという配慮もなされていたであろう。

また、中宮を一例とする後宮の権勢図への言及は、この「竹河」にとどまらない。「紅梅」も「竹河」でチューニングだといったのと同じような様子が記されるが、その中でも紅梅大納言の大君、中の君の結婚が問題とされ、

内裏春宮より御気色あれど、内裏には中宮おはします、いかば

かりの人はかの御けはひに並びきこえむ。

(紅梅)

と、またしても明石の中宮の楊貴妃まがいの権勢が強調される。

そしてこのことはより普遍的なこととして作者に意識され、

さりとて、思ひ劣り卑下せんもかひなかるべし。春宮には右の

大臣殿の並ぶ人なげにてさぶらひたまへばきしろひにくけれど、

さのみ言ひてやは。人にまさらむと思ふ女子を宮仕に思ひ絶え

ては、何の本意かはあらむ、

(同)

と女と宮仕えの問題として敷衍される(配列は「紅梅」が「竹河」

より先だが、年立は逆)。これは白詩でいうと、

扶入車中不教哭 皆云入内便承恩

を連想させるものであらう。

また実際に宮仕えを決意した上で、中宮の権勢を気にする件りも

ある。「竹河」に戻ると、中の君を出仕させよという強い夕霧の勸

めによって、玉璽は自分の代りに中の君の尚侍としての出仕を決意

するが、その時の心境は次のごとくである。

このたびは、中宮の御気色とりてぞ参りたまふ。大臣おはせま

しかばおし消ちたまはざらましなど、あはれなることどもをな

ん。

(竹河)

ますます中宮は楊貴妃のイメージを強くしてくるが、しかし、も

し父親が生きていたらその後だてによって圧倒されるようなことは

なかったのにと悲しむところ、単に中宮の権勢を述べようとすることも

のではなく、入内をめぐる確執を問題とするのだということがわかる。これに敗れたものが怨嘆に泣くこととなる。

そして玉璽の心配は事実となる。院に参入した大君の方だが、や

がて男子を出産すると弘徽殿の女御も

あまりかうてはものしからむと御心動きける。

(同)

ということになり、「おのづから御仲も隔たるべかめり」。女御と大

君の間も冷たくなってゆくというのである。そして女御や明石の中

宮などにばかり味方して、「はかない事にも、この御方さまをよか

らずとりなしなどする」ことになったという。

こうして「竹河」「紅梅」の両巻にわたって入内をめぐる女性集

団の葛藤が語られるのだが、その一部が上陽人を引いた「竹河」の

部分であった。逆にいえばこれほどの「上陽白髮人」と共通の裾野

を広げた中で、先の一節が語られたのである。

これは十分に意図的であらう。そしてとくに楊貴妃に相当する役

どころを明石の中宮に割り当てたところ、実に巧みだったというべ

きだらう。

そしてもし、白詩の力を強く評価するなら、明石の中宮の権勢は

抑制されなければならないものと見られていたことになり、中の

君たちの運命は上陽宮に白髪を迎えるものとなりかねないという、

冷やかな観察の目で見られていたことになる。

物語冒頭では桐壺更衣は落命したことだった。第二世代にそれが

おこつてもおかしくはない。以下宇治十帖が宮中を舞台とせず、宇治へと世界を展開させていったのは、憂鬱なくり返しを避けたかったばかりか、もつぱら、事は心の内面にあることに、気づいたからであらう。

五 縛戎人―玉鬘

夕顔の遺児玉鬘は乳母にもなわれて九州に下向し、久しく筑紫の地にあつたが、美しく成長するにつれて土地の者の求婚もわずらわしく、意を決した乳母によって筑紫を脱出、帰京の途につく。

やっと淀川の川尻に到着したが、さてその時、乳母の子豊後介が白詩の一節を誦じたという。

あさましきことを思ひつづくるに、心弱くうち泣かれぬ。「胡の地の妻児をば虚しく棄て捐てつ」と誦するを、兵部の君聞きて、「げにあやしのわざや。年ごろ従ひ来つる人の心にも、にはかに違ひて逃げ出でにしを、いかに思ふらん」とさまたま思ひつづけらるる。帰る方とても、そこ所と行き着くべき古里もなし。

この「胡の地」云々というくだりは白氏文集(卷三)所載の「縛戎人」に見える。

涼原郷井不得見 胡地妻児虚棄捐
と。本文によれば口吟したものであり、またこの訓みが平安末期の

訓読と一致するというから、白詩の引用は認めてよいであらう。従来も諸書ひとしくそれを認めてきた。

この部分は右に先立って船頭たちが船歌を歌うくだりもある。

例の舟子ども、「唐泊より川尻おすほどは」と、うたふ声の情なきもあはれに聞こゆ。豊後介、あはれになつかしううたひさびて、「いとかなしき妻子も忘れぬ」とて、：

要するに「唐泊より」という船歌は口吟した途中の部分をおいて「妻子も忘れぬ」に続くものだったらしい。この歌を口吟させ、末尾の「妻子」から白詩をよび起こすという構想をとったもので、周到な用意のもとに行なわれた白詩の引用だったと思われる。

そこで源氏のこの引用はいかなる意図によるものだったのか。

そもそも玉鬘の冒頭からこのあたりまでは、いわば「鄙物語」ともいうべき部分を意図的に作ったと思われる個所で、たとえば「檜垣」などの零落した姿を一点景とするような鄙への関心が、この時代の都の読者に存在したからであらう。

鄙は遠い。玉鬘が下向する時も、

あやしき道に添へたてまつりて、遥かなるほどにおはせむことの悲しきこと。

といい、

ことなるしつらひなき舟にのせて漕ぎ出づるほどは、いとあはれになむおぼえける。

と思う。

筑紫に到着したらしたで、「好いたる田舎人ども、心懸け消息がある、いと多かり」というのは、例の『竹取物語』そっくりで、玉璽を月の世界から来たかぐや姫になぞらえる趣である。月の都と地上ほどに違う世界が筑紫であり、その土地で玉璽はかぐや姫ほど光り輝いていたといいたいのであろう。

その、田舎人のむくつけさは肥後の大夫監に極まる。

肥後国に族ひろくて、かしこにつけてはおぼえあり、勢い^{いさ}かめしき兵ありけり。むくつけき心の中に、いささか好きたる心まじりて、

いる男で、

三十^{みそ}ばかりなる男の、丈高くものしくふとりて、きたなげなけれど、思ひなしくとましく、荒らかなるふるまひなど、ゆゆしくおぼゆ。色あひ心地よげに、声いたう枯れてさへづりゐたり。

という有様であつた。いささかユーモラスだとはいえ、こうした男に代表される、都遙かな鄙を、都人はいかにも異質なものととして受取つたであらう。

この鄙ぶりはまさに「蕃」というべきであつた。

大曆年中没落蕃 一落蕃中四十載

蕃候敵兵鳥不飛

將軍遂縛作蕃生

没蕃被囚思漢土 帰漢被劫為蕃虜

漢心漢語吐蕃身

と「縛戎人」に「蕃」が頻出する。蕃とは吐蕃、詳しくはチベットのことを指しチベットをわが筑紫に比定するのはいかにも大仰すぎるが、これはいつものことだ。むしろ蕃を一般的な野蕃の地、化外の鄙と考える方が源氏の読者に則していよう。あるいは筑紫にチベットを重ねることによって鄙ぶりの徹底を計ろうとしたものか。あの肥後監は吐蕃人となつた。

そもそも「縛戎人」は涼州を本貫とする漢人が吐蕃に生活する身となり、ひそかに脱出してきたところ漢軍と出会う、喜んだのも東の間、今度はチベット人と見なされて捕虜となり、今や江南に送られる境遇を嘆くという詩である。彼は捕虜集団の中におり、他の男たちが境遇を悲しむのに対して、さらに凄惨なわが身上を語つたという構想をもつ。

右に引いた「蕃」はこの境遇の中でのチベットを語つたもので、かりに出身地の涼州そのものが長安の都からは遠いとしても、チベットはより遙かな異土として「身著皮裘繫毛帶」といった異風とともに叙述されている。

もし筑紫を蕃になぞらえるものとすれば、筑紫は大変な辺地だということになり、そこからの脱出が重みをもって来よう。

事実、源氏は、

大夫監は、肥後に帰り行きて、四月二十日のほどに日取りて来むとするほどに、かくて逃ぐるなり。：

かく逃げぬるよし、おのづから言ひ出で伝へば、負けじ魂にて追ひ来なむ、と思ふに、：

年ごろ従ひ来つる人の心にも、にはかに違ひて逃げ出でしを、

といい、「縛戎人」も、

蕃候殿兵鳥不飛 脱身冒死奔逃帰

という。

そして逃走の途中の困難もひどく、玉璽一行は、幸い早舟を仕立てた上に追風まで得て「走り上り」、響の灘も無事に通過したが、

かの恐ろしき人の追ひ来るにや、と思ふにせむ方なし。

という有様で、川尻に到つてやっと、「すこし生き出づる心地する」ということになる。

「縛戎人」は漢詩だから、比ぶべくもなく表現は大ききで、

昼伏宵行経大漠 雲陰月黒風沙惡

驚蔵青塚寒草疎 偷度黄河夜水薄

というが、意図するところは同じであらう。

それでは蕃地の遠さとそこからの脱出が引用の意図だったかという、実は「縛戎人」の主人公の特殊さは、この主人公が漢人でありながら蕃地に零落し、そこを脱出して漢土に帰ろうとしたにもか

かわらず、またそこにも受入れられなかったという境遇をもつことにある。

この双方からの拒否は、源氏においてもひとしい。右のように、いざ逃げ出してみても、それでは都に暖かく迎え入れられるかという、

帰る方とでも、そこ所と行き着くべき古里もなし。知れる人と

言ひ寄るべき頼もしき人もおぼえず。

という状態で、九州という「こころの年月住み馴れつる世界を離れて」来た一方、都のどこで寄るべなく、「浮かべる波風に漂ひて、思ひめぐらす方なし」という、二つの拒否の間に漂う様子を述べている。

これを「縛戎人」ふうにいえば、これは、

游騎不聴能漢語 將軍遂縛作蕃生

没蕃被囚思漢土 帰漢被劫為蕃虜

漢心漢語吐蕃身 (圈点中西)

という「蕃」と「漢」のはざまに漂うことであらう。

「漢心漢語」をもちながら今や蕃身であるのが豊後介であった。彼は「ただ水鳥の陸にまどへる心地して」「帰らむにもはしたなく」思う。いかにも二つのはざまにさすらう「縛戎人」の主人公とひとしいであらう。

もしこのまま都に受入れられなければ、筑紫に豊後介が妻子を棄

てたことも、兵部の君が夫を捐てたことも、意味がなくなる。まさに「胡地に虚しく棄て捐て」たこととなる。もちろん棄てた時は、ひそかに出て来たのだから、

誓心密定帰郷計 不使著中妻子知

ということになる。

さてそこで、「縛戎人」の二つの拒否がそのまま現在の豊後介をはじめとする玉璽一行の人々の境遇と同じだとすると、最初に筑紫へとさすらい、そこでも在地の豪族の力におびやかされて都へと逃げ戻りながらの「住みつくべきやうもなき」下賤の者の苦しみや悲しみを、源氏の作者が「縛戎人」の主人公になぞらえて、ここに提出しているのだと、知られるであろう。

両地寧如一処苦

という、三界に身のおき所もない困窮こそがこれらの人々の身上であつた。この「縛戎人」は諷諭詩であり、「達窮民之情也」とされる。窮民の心情とはいかなるものか、それを源氏の作者は、わが物語の筋の上に据えて、観察しようとしたと思われる。

すでに私は、作者の中に「鄙物語」なる小編を構えようとする意図があつたろうことを述べた。その場合の「鄙」とは、どうやら空間的な遠方をのみ指しているのではなかったらしい。鄙の人間としての低下層級の人々、生活における鄙性、そんなものが念頭にあつて、これを都と鄙という空間に横たえて語ってみたいにすぎないのだ

ろう。

白楽天とて「窮民」の境遇を漢と蕃という空間に据えてとり出してみたが、空間の設定は便法にすぎなかった。源氏も同じく、かりに空間を設定してみたのであろう。

源氏における「鄙」は、もう一方の極としての常陸にも見られる。しかしそれは常陸そのものではなく、これを背負った末摘花の中に貧窮としておきかえられるものであつた。筑紫また、しかりである。窮民のよるべなき、それは妻子を棄て捐てることによつて極まるのであろうか。その認定は、一大恋愛物語を書きつづりながら全円的に宇宙観を示しつづけてゆくこの作者にとって、まことにふさわしい。

六 驪宮高―若菜上

白氏文集卷四の冒頭に位置する「驪宮高」は驪宮の壮麗さを述べながら、久しく天子の行幸のないことを言い、その理由として、もし天子が行幸するなら、その人民の財を費すこと莫大なものとなるからだとして、行幸のないことの徳をたたえたものである。「美天子重惜人之財力也」と諷諭の意を述べる。

さて、この詩の源氏への影響を説くのが、『孟津抄』、『河海抄』などであり、近時も丸山氏（二〇五ページ）、古沢氏また古典全集本（四巻九〇ページ）みな「驪宮高」の引用とする。その源氏とは「若

菜上」、折しも四十を迎えた源氏の賀宴を紫の上が行ない、その壮麗さは目を奪うものがあつたが、その記述について冷泉帝が四十の賀にかこつけて源氏の許に行幸したいと思うのに、源氏が辞退してかなわないことを残念に思つたという。

今年はこの御賀にことつけて行幸などもあるべく思ひおきてけれど、「世の中のわづらひならむこと、さらにせさせたまふまじくなん」と辭^{いな}び申したまふこと度々になりぬれば、口惜しく思しとまりぬ。

この「世の中の」という源氏の考え——「世間の迷惑になるようなことは一切なさいませんように」というものに対して「驪宮高」の、

吾君不遊有深意 一人出兮不容易
六宮從兮百司備 八十一車千萬騎
朝有宴饌暮有賜 中人之産數百家
未足充君一日費……

君之来兮為一身 君之不来兮為万人
が参照せられる。詩は天子の行幸がいかに財を要するものかをいい、行幸のないのは万人のためだというから、必ずしも出典そのまま源氏に引かれるものではない。もし關係を認めるなら、意味を生かした暗喩としての引用だということになる。

ただ、民を慮つて天子の行幸をひかえるといった類は、多くの書

物に見られるだろう。何も文集の、しかもこの詩に限るわけでもない。そういう推測も十分可能である。

しかし、このあたりをよく味わってみると、「世の中のわづらひ」云々という一条は、もっとも大きな山場となっており、この一条に重い意味を作者のこめていることが知られる。

というのは、紫の上の主權する賀宴でありながら、楽器にことよせて桐壺帝のことや藤壺のことが思ひ出され、

故入道の宮おはしましかば、かかる御賀など、我こそ進み仕まつらましか、何ごとにつけてかは心ざしをも見えたてまつりけん

と源氏は關係を逆にして、三十七歳で没した藤壺を回想し、わが心の中を示すことなく過ぎてしまった縁を、残念に思う。

そして一方、冷泉帝も藤壺を思ひ出す。

内裏にも、故宮のおはしまさぬことを、何ごとにもはえなくさうざうしく思さるるに、

そこでせめて父に当る源氏に対してでも、

この院の御ことをだに、例の、跡あるさまのかしこまりを尽くしてもえ見せたてまつらぬを、世とともに飽かぬ心地したまふも、

だから、源氏四十の賀にことよせて行幸したいと思つたのに、源氏が辞退したというのである。

つまり、ここでは藤壺と源氏、冷泉という隣りある人間関係がクローズアップされており、それぞれが遠慮から行動を束縛されて思いを残していること、その中でも思慕の中心が藤壺であることが注目される。

まるで藤壺思慕の中で行幸辞退を申し出たとさえいつてもよいくらいだが、さてその藤壺は、どんな人だったか。死の直後に書かれた人物評には、

かしこき御身のほどと聞こゆる中にも、御心ばへなどの、世のためにあまねくあはれにおはしまして、豪家（ごうけ）にこと寄せて、人の愁へとある事なども、おのづからうちまじるを、いささかもさやうなる事の乱れなく、人の仕うまつることをも、世の苦しみとあるべきことをば、とどめたまふ。

（薄雲）

とある。世間ではしばしば身分の高さにつけて人の愁えとなることも自然にまじるものだが、藤壺は人々の奉仕に対してさえも苦勞をかけるようなことはやめさせたというのである。

藤壺は、まさに「驪宮高」で「美」められたような思想のもち主であり、「若菜上」の記述に戻ると、この藤壺の思想に思い及んで源氏が冷泉帝の行幸を辞退したとさえいえよう。

そう源氏をして思わせるものも、文脈の筋道によると藤壺が三十七歳という、四十の賀を待たずに死んだことへの痛恨だったと思える。痛恨が行幸辞退となったとすれば、この辞退は、一見つけ足り

のようでありながら、実は大きな意味をもつものであった。しかし、このことを源氏の作者は単なる藤壺の人物設定の中で述べたとは思わない。

当の冷泉帝は四年前に大原野に行幸した（行幸）。そのさまは、今日は親王たち上達部も、みな心ことに御馬鞍をととのへ、隨身馬副の容貌（かたち）丈だち、装束を飾りたまうつつ、めづらかにをかりたまへり。青色の袍衣、葡萄酒染の下襲を、殿上人、五位六位まで着たり。

（同）

とあり、まさに「驪宮高」の、

六宮從兮百司備 八十一車千萬騎

に相應するが、さてその時に源氏の作者は忘れずに、

めづらしうをかしきことに、競ひ出でつつ、その人ともなく、かすかなる脚弱き車など輪を押しひしがれ、あはれげなるもあり。

（同）

と書き加える。この「脚弱き車」が「朱輪」の反対であろうことはすでに先稿に述べた。

また、もし源氏の作者が『紫式部日記』の著者と同じだとすれば、一条帝の土御門殿行幸の華麗なる描写の後に、

御輿（ごよ）かへたてまつる。船菜（ふねな）いとおもしろし。寄するを見れば、駕輿（かよ）丁の、さる身のほどながら、階（か）よりのぼりて、いとくるし

げにうつぶしふせる、なにのこととなる、高きまじらひも、身のほどかぎりあるに、いとやすげなしかしと見る。

とある。

これら下賤なるものをつねに視野に入れるのが作者であり、藤壺はそうした作者の分身として登場せしめられたというべきだろう。

白氏の「美天子重惜人之財力」は、作者の強く共感するところだったと思われる。

こうしてみると、作者が「世の中の」云々という一行を書き加えたことは、故き藤壺への賛美ととれるが、しかしそれだけでは不十分であろう。なぜなら行幸のないことは、子として親の四十の賀を果せないことであり、それは源氏が「何ごとにつけて」も「心ざしをも見えたてまつ」れなかった宿世の縁による恨みと、通い合うものだったからである。冷泉帝も「世とともに飽かぬ心地したまふ」と書かれている。

つまり藤壺への追想とは、宿世への追憶でもあった。その中で冷泉帝はもう一つ天子としての制約を持つにすぎなかった。

そのために行幸を欠くことになる「若菜上」のこれまでの美々しい描写は、まことに空しくみえる。画龍点睛を欠くというべきか。

二条院の紫の上の賀宴は目を奪うばかり華麗だったのに。

華麗なる二条院、しかし行幸の欠落——、そういえばもう「驪宮高」を思い出すしかない。

高々驪山上有宮 朱楼紫殿三四重

遅々兮春日 玉甃暖兮温泉溢

嫋々兮秋風 山蟬鳴兮宮樹紅

これが驪宮の壮麗な様子であり、読者はこれを二条院へと重ねることになる。

ところが行幸はない。

翠華不来歲月久 牆有衣兮瓦有松

二条院がいかに華美を尽くそうとも、牆、瓦には衣、松の幻影を認めないわけにはいかない。

この結果を冷泉帝の不行幸とすれば、冷泉帝は、

吾君修己人不知 不自逸兮不自嬉

吾君愛人人不識 不傷財兮不傷力

という有徳の天子となる。

いや、有徳の天子とさせるものが源氏の辞退であるとすれば、はかばかしく相会うことのかねえられない宿世の縁が、逆にわが子をして有徳たらしめるという運命の糸を、作者が見ていたこととなる。この構造を見えやすくしたものが「驪宮高」であった。

七 両朱閣—賢木

「賢木」は六条御息所の伊勢下向から語られはじめる。併せて斎宮も下向するのだが、これにつぐ話題は桐壺帝の崩御、そして臘月夜

との密会という、後々に大きく源氏の運命を変える事件や、藤壺との密会という苦悩ばかりの残る事件があり、これはやがて出家へと藤壺をみちびく。

いわばモノクロームの印画紙が連続するような「賢木」の巻だが、さてその途中、桐壺帝崩御の後、藤壺も三条宮に移るべく兵部卿の宮が参上した時、源氏は宮や王命婦とともに、凋落の影をます邸にあって歌をよんだ。

さえわたる池の鏡のさやけきに見なれしかげを見ぬぞかなしき
ところがこの歌について『河海抄』は、文集巻四の「両朱閣」から、

粧閣妓楼何寂靜 柳似舞腰池似鏡
を引いている。

案之池鏡在其心乎此詩貞元双帝子昇仙旧宅為両朱閣也旧院仙洞
幽連致潜相通歟
と。

『河海抄』は他に平兼盛の、

池はなほ昔ながらの鏡にて影見し君がなきぞ悲しき

(大和物語七二段)

をあげるから、特に歌の下句について古歌を踏まえつつ、池の鏡について白詩を踏まえたと考えたものである。

この「両朱閣」の影響は丸山氏(一〇五ページ)も表示している

が、水野氏・古沢氏は認めず、古典全集本にも言及はない。

「両朱閣」は「刺仏寺 寢^{ヤシヤ}多也」とする諷諭詩で、南北にあい連なる朱閣が雙帝の二人の公主のものであったが、簾を吹いて昇仙した後宅亭ばかりが残り、仏寺となって、

粧閣妓楼何寂靜

柳似舞腰池似鏡

花落黄昏惜々時

不聞歌吹聞鐘磬

寺門救榜金子書

尼院仏庭寛有余

青苔明月多閑地

という状態になったという。そして詩はかつて平民の家屋を併せて宮をおき、今やそれを梵宮とすることをもって、

漸恐人間尽為寺

と結ぶ。

さてこの『河海抄』の指摘は、池の鏡という一句だけを共通項と見なすと、源氏と白詩との間の距離は遠いように見えるが、右に述べた如き院の寂寥を背景に考えると、情景はまことによく似ている。季節は冬で「花落黄昏」とは違いますが、

雪うち散り風はげしうて、院の内やうやう人目離れゆきてしめ

やかなるに、

御前の五葉の雪にしをれて、下葉枯れたるを見たまひて、
という庭前の様子は「寂靜」をきわめている。とくに今は藤壺が去ろうとして、その迎えの使者が到着した場面であり、「粧閣妓楼」

とはいえないまでも、中宮の華やぎを欠落させようとするところである。さらに先立っては六条御息所も訣別していった邸である。十四歳の娘、斎宮もともどもに。また、桐壺院の崩御は多くの女性たちの退去をとまなう。

御四十九日までは、女御御息所たち、みな院に集ひたまへりつるを、過ぎぬれば、散り散りにまかてたまふと。

白詩の寂寥感も、ただ人が去り寺となっただけのものではない。「柳似舞腰」とか「花落」とか、また「不聞歌吹」とは明らかに女性を欠く寂寥であり、とくに柳の中に舞腰を幻視するという生々しさももっている。

それはそのまま、源氏の歌に秘められてはいまいか。源氏の歌の「見なれしかげ」とは桐壺院だということになっているが、これを藤壺と見るべきではないか。

そもそも藤壺の兄兵部卿が、

かげ広みたのみし松や枯れにけん下葉散りゆく年の暮かなと歌ったのは、松(院)の崩御によって下葉たる女御更衣が散りぢりになってゆく状態をよんだもので、中心は藤壺の退去にある。

そして源氏の後で歌をよむのも藤壺の侍女王命婦。彼女は、年暮れて岩井の水もこほりとち見し人かげのあせもゆくかなという。これまた「人かげがあせてゆく」とは院のことではない。

多数の人々であり、その中心が今こそ「あせもゆく」のである。源氏の歌はこの二首に挿まれている。藤壺を惜しむのでなければ前後に連らないし、情景にもふさわしくない。

いや心情にこそふさわしくないというべきだろう。氷の中にしいて思い浮かべようとしているのは、藤壺ではなかったか。

実は源氏の歌に「あまり若々しうぞあるや」という評語がある。これは果して作の幼稚さをいうのだろうか。幼稚だという必要があるのだろうか。

この評語は、なお藤壺を慕う気持を抑え切れない、この歌の内容について「あまりにも初々しい」といったのではないか。

ところで、白詩は仏寺となることを刺つたものであった。すると当然連想されてくる事柄は、以後に展開する藤壺出家のことであろう。

藤壺は源氏との密会に苦悩し、中宮の位も去り、「面変りせむこと」を次第に心に決するようになる。やがて出家は十二月の十余日ばかり、中宮の御八講の最後の日で、

わが御ことを結願にて、世を背きたまふよし仏に申させたまふに、みな人々驚きたまひぬ。……

心強う思し立つさまをのたまひて、果つるほどに、山の座主召して、忌むこと受けたまふべきよしのたまはず。御をぢの横川の僧都近う参りたまひて、御髪おろしたまふほどに、宮の内ゆ

すりて、ゆゆしう泣きみちたり。

というごとくであった。

一方源氏もこの間に雲林院にこもり、天台六十巻の經文を読みつづけたという。二条院における煩惱が少しづつ仏法に薰染されつつ事態を進行させるのだが、さてそこで、この藤壺の出家が「宮の内ゆすりて、ゆゆしう泣きみち」しめるものであったことは、重要であらう。

人々を驚愕せしめ、皆人の袖を濡らした藤壺の出家は、けっして仏道に帰依する隨喜の涙に濡れたものではない。むしろ痛ましいものとして描かれるのだが、それはしかし、単に藤壺の若さや美貌、また地位を棄てるがゆえのものでもあるまい。それは、出家した藤壺をめぐって、たとえば、

月は限なきに、雪の光りあひたる庭のありさまも、昔の事思ひやらるるに、いとたへがたう思さるれど

といった風景が展開するような冷えびえとした人生へと、華麗なるものが変転してゆくそのこと自体への、大きな見通しが、心を戦かせるのだと、いってよいのではないか。

その変転は、桐壺院の崩御を最初の契機として、藤壺の三条宮への退出、そして出家へと移ってゆくが、この進行を彩るものは雪景色で、上述の藤壺の退出の折も、

雪うち散り風はげしうて、

という日であり、院の一周忌の日も、

霜月の朔日ごろ、御国忌なるに、雪いたう降りたり

とあり、その中で源氏は藤壺と歌を贈答する。その後の出家後の対面が右の描写であった。

だから読者は、場所が二条院から三条院へ変っているにしても、藤壺の坐っている舞台が変わらないような錯覚をもつ。その同じ舞台で、先にいった変転が行なわれ、ゆゆしき落飾が行なわれた。

この舞台を、

青苔明月多閑地 比屋疲人無処居

と称することはできないか。少くとも、かつてここにあった尊貴な女性は、落飾して別界に去ってしまったている。

白詩は平民の家を潰して豪邸を営み、それが仏寺と化するという権勢のあり方について刺ったのだから的は違うが、同じように女性の華やかな世界が仏界へと化してゆく、人世の変転への觀察が、源氏の作者の中にもあったと思われる。

そしてこの変転を、作者はむしろ冷やかに見ているのではないか。白詩の諷論になぞらえていえば、仏道に帰さざるをえないような運命を辿る人世の多いことを、刺る心はなかったであらうか。それを藤壺出家に関する人々の動転と見れば、池の鏡に映った白詩の影は、大きいと言わねばならない。

八 牡丹芳—幻

「幻」は紫の上の死後、もはや約束されたような死に向かって源氏が命を傾けてゆく過程を語った巻で、これにつづく「雲隱」において、源氏は死に到るらしい。

したがって「幻」には紫の上追慕がみちみちており、巻名も、なき紫の上の魂を求める幻術士に由来する。そしてこの幻術士が、なき楊貴妃を求める幻術士を連想したものであるのと軌を一にして、巻中の部分にも白詩が引用されている。

若宮、まろが桜は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに帳を立てて、帷子を上げずば、風もえ吹き寄らじと、か
しこう思ひえたり、と思ひてのたまふ顔のいとうつくしきにも、
うち笑まれたまひぬ。

これは紫の上遺愛の桜が咲いたとして、六歳の匂宮が散らさないように保護しようというくだりである。彼は桜のまわりに「帳を立てて、帷子を上げ」ないようにしようという。

この折、桜はどれほどの大きさであろう。別に苗木とことわるわけでもなく、紫の上生前から二条院の庭に紅梅と並んで咲いていたらしい（御法）から、それほど小さいものではない。それを帷によつておおい、帷子を垂れてかくすとは、いささか不自然である。少くとも発想の奇を感じざるをえない。

果せるかな、これは中国の故事によるものらしい。『花鳥余情』には唐の穆宗が重頂の帷によって欄檻をおおい、惜花御史をおいて管理させたという『雲仙雜記』を引く。のみならず『河海抄』はここに白氏文集の影響を見る。巻四「牡丹芳」の、

共愁日照芳難駐 仍張帷幕垂陰涼

を掲げるのである。

ここに生ずる疑問は単に穆宗の重頂の帳の故事を引いたか「牡丹芳」を引いたかという問であらうが、「帷幕を張り」といい「陰涼を垂る」というところが「帷を立て」「帷子を上げずば」という点と符合し、より具体的に「牡丹芳」を意識した表現だったらしいと思われる。

この白詩の引用は、丸山氏も認めるところである。古沢氏はふれず、水野氏は「石橋」や蕪村句をあげるにとどまるが、ここに積極的に「牡丹芳」を重ねてみると、右にふれた桜の不自然さはよく理解できよう。

すなわち、源氏の桜は白詩の牡丹のイメージを重ねたものであり、この桜が紫の上をしのばせるものであれば、紫の上は牡丹と重ねられたものとなる。紫の上は權桜をもつたとえられたことがあったが、いま「幻」のここでは、

外の花は、一重散りて、八重咲く花桜盛り過ぎて、權桜は開けとあり、その桜が「にほひ満ちた」というのである。さながら紫の

上を開うごとくで、そのことにおいて、帷は十分意義をもつて来よう。

しからば牡丹、実は紫の上はどのような美しさなのか。

黄金藥綻紅玉房 千片赤英霞爛々

百枝絳焰燈煌々 照地初開錦繡段

当風不結蘭麝囊

という絢爛たる美しさである。これは同じ桜でも樺桜をもつてたとえられた紫の上に似つかわしい。

そして白氏は牡丹を仙境の花にさえ勝るものとする。

仙人琪樹白無色 玉母桃花小不香

と。まるでかくや姫をさえしのぐ勢まである。

宿露輕盈泛紫艷 朝陽照耀生紅光

紅紫二色間深淺 向背万態隨低昂

こう告げられると、源氏の作者の中にこの「紫」への注目があつたのかとさえ思いたくなるではないか。牡丹は必ずしも紅色ばかりではなかった。

また、叙述がさらに進むと、花は花を離れて人間に近づく。

映葉多情陰羞面 臥叢無力含醉妝

低嬌笑容疑掩口 凝思怨人如斷腸

穠姿貴彩信奇絶 雜卉乱花無比方

源氏のこの部分が、光源氏の紫の上追慕の場面であることを、思

い起こすべきだろう。もし推定どおり紙背の文脈を「牡丹芳」が作っているとしたら、右のような牡丹のあり方は、そのまま紫の上の姿態となつて、光源氏の脳裏にあつたことになる。

よみがえつて来るこの紫の上に比べれば、他の誰彼は物の数でもなかつたろうか。「無比方」と。

石竹金錢何細碎 芙蓉芍藥苦尋常

とは、一体誰々を比較することになるのであらう。事実、源氏はこの後女三の宮、明石の君をおとずれるが心なごむことはない。源氏において紫の上をしのぐ女性がいなかったことも、多くの読者に感ぜられるところであらう。

牡丹が右のような美をもつことは「牡丹芳」の最後にもまた「牡丹妖艷色」と再言されているが、要するにこのように妖艷、紫艷の穠姿は、紫の上そのものの姿だった。

あたりににはひ満ちたる心地して、花といはば桜にたとへても、なほ物よりすぐれたるけはひことにものしたまふ。

(若菜下)

のように。これこそが「まろが桜」であり、これを今、帷をもつておつたのである。

しかし、紫の上は現し身をもっていない。もつものは、後に残された源氏である。

残鶯一声春日長

とは、まさに源氏その人の姿ではないか。

当然彼は遺芳をとどめたいと願ったであろう。そして匂宮ともども、そのとどめがたいことを嘆いたであろう。

共愁日照芳難駐

と。その上で「張帷幕垂陰涼」とは、当然すぎることとなった。

そうしながら、源氏の胸中にはたまゆらにすぎた紫の上の一生が回想されていたであろう。自分より八歳も若く、四十三歳で没してしまつた紫の上を。出会いから数えても三十三年間の歲月であつた。それを牡丹の花期になぞらえるのは距りがありすぎるだろうか。

白詩は、

花開花落二十日 一城之人皆若狂

という。これも源氏にとっては紫の上さながらに思えたのではないか。くり返しいうと、その死が自らの死にひとしいほどの人への思慕は「若狂」というべきではないか。

こうしたところまで含めて、私には「牡丹芳」の影があまりにも濃く源氏を彩っていると思えるのだが、さてそこで白詩はいうまでもなく諷諫詩であつた。

美天子憂農

という。以上の牡丹賛美は一転して、

人心重華不重実 重華直至牡丹芳

となり、「元和天子憂農桑」たことをあげ、

我願暫求造化力 減却牡丹妖艷色

少廻卿士愛花心 同似吾君愛稼穡

という結論に到る。要するに華美な牡丹を愛することはやめて稼穡を重んずるべきだといふのである。

これによつていえば、源氏は聖天子の徳に比すべきものをもつていない。桜におぼれ、桜の遺芳をのみ慕つて、やがて死を迎えようとするのだから。

程なく源氏を死に赴かせる作者には、たしかに、紫の上へのみ埋没した源氏への冷やかな批判もあつたであろう。浮華を事としてすぎることの多かつた、源氏五十一年への省察は、けつして甘いものではない。それは源氏個人の生き方というより、恋愛そのもののへの省察であり、その浮華に殉じて程なく死を迎える源氏を主人公として立てたのであつた。

しかし、作者が源氏にまったく救済を与えていないのではない。右にあげたくだりの後で、源氏は女三の宮を訪れ、その帰依の心を羨しく思うという。そこで源氏は仏の花を発見し、改めて紫の上を思い出し、花の美しさについて次のように発言する。

關仞の花の夕映えしていとおもしろく見ゆれば、春に心寄せたりし人なくて、花の色もすさまじくのみ見なさるるを、仏の御飾にてこそ見るべかりけれとのたまひて、

「春に心寄せたりし人」とは紫の上のことだ。彼女が散つてしまえ

ば、なまじ花の華麗さがあっても不本意に思うというのは、まさに「牡丹芳」の石竹、金銭、芙蓉、芍薬が匂いを失うというのとひとしいだろう。咲いていたって美しいとは思われない。

ところが、それも見方をかえて仏を莊嚴するものとして見れば美しい。そう見るべきだという。そして山吹などを、まるで人間のごとく語って、美しさをほめる。

これは天子が稼穡に心を尽くすのと、同じ構造であろうか。花の浮華をすてて農耕に心を尽くすのがりっぱな天子だったように、桜の浮華のみに心を砕かず、仏莊嚴の物として見るのがりっぱな君子なのだという図式が、ここにはある。

いい方をかえれば、なぜここで源氏が關伽の花の夕映などをもち出したのか、その構想の必然性を考えると、その底流として、牡丹から稼穡へと移る白詩の力学が潜んでいたのではないか。白詩の諷諫を受容し、それを半ばうべなうのが光源氏の一面だったという造型を、作者が心がけたのではなかったらうか。

ただ、源氏は結局聖天子とは異なる人物であった。半ば關伽の花を視野に入れながら、やはり紫の上に埋没していったのだというのが、作者の主張である。

これは、何ら抑制を持たない場合と結果的には一致するが、しかし白詩を潜ませることによって妖艶への耽溺に反措定を与え、しかなお妖艶に生命を奪われていったと語ることの重みは、両者を大

きく距てるものと思われる。

注

1 文中略称をもって引用した諸書は、次のごとくである。

(一)大系本 山岸徳平校注『源氏物語』(日本古典文学大系) 岩波書店 一九五八年—一九六三年

(二)古典全集本 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』(日本古典文学全集) 小学館 一九七〇年—一九七六年

(三)古沢氏 古沢未知男著『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』 桜楓社 一九六四年

(四)丸山氏 丸山キヨ子著『源氏物語と白氏文集』 東京女子大学学会 一九六四年

(五)水野氏 水野平次著『白楽天と日本文学』(復刻版) 大学堂書店 一九八二年

(六)傳良平氏 『源氏物語と白氏文集』主として白氏の諷諭詩との関係について『筑波大学大学院地域研究科修士論文(未刊)』 一九八七年

(七)村上哲見氏 『燈影・壁影』中国文学報(京都大学) 一九五四年

(八)秋山虔氏 『源氏物語の世界』九一ページ 東京大学出版会 一九六四年

2 文中引用した本文は、次のものによる。

(一)『源氏物語』 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』(日本古典文学全集) 小学館 一九七〇年—一九七六年

(二)『太平記』後藤丹治・金田喜三郎校注『太平記』(日本古典文学

- 大系) 岩波書店 一九六〇年
- (三) 『紫式部』 中野幸一校注・訳 『紫式部日記』 (日本古典文学全集) 小学館 一九七一年 一九〇ページ
- (四) 『白氏文集』 『白氏長慶集 上下』 (長沢規矩也編 『和刻本漢詩集成』) 汲古書院 一九七四年
- (五) 『一葉抄』 井爪康之編 『一葉抄』 (源氏物語古注集成) 桜楓社 一九八四年
- (六) 『源氏物語聞書』 伊井春樹編 『弄花抄付源氏物語聞書』 (源氏物語古注集成) 桜楓社 一九八三年
- (七) 『河海抄』 玉上琢弥編 『紫明抄 河海抄』 角川書店 一九八七年
- (八) 『岷江入楚』 中田武司編 『岷江入楚』 (源氏物語古注集成) 桜楓社 一九八〇年
- (九) 『花鳥余情』 伊井春樹編 『松永本花鳥余情』 (源氏物語古注集成) 桜楓社 一九七八年
- (十) 『孟津抄』 野村精一編 『孟津抄』 (源氏物語古注集成) 桜楓社 一九八〇年